

① 剃髮章

剃髮章ていぱつしょう

深草に庵いおりしめたる

人まねにはあらて

元結の霜掃しもはらすて、待や雪

其引

寒にも見違あたまられな其天窓

亦またひとり頭巾ずきん仲間や冬籠ふゆごもり

そり捨て安やすき寐ね臥がしや冬籠

髪置かみにそる身の上もおかしさよ

萬楚ばんそとし頃風流ころかぜりゅうに遊ぶの

欲ほにあまり我輩われらに

かたちをうつしものする事を

霜月しもづきやそれもあるへき頭巾親

安永乙未年冬十一月

萬楚

存義

買明

葵足

小知

常仙

③ みちのく須加川連新春賀摺

小みちかき日向ひなたは

もてと庵いおりの梅

なといまた

させる物も

ひろい

不申候

こはやくも聞へし春色の

うるはしければまつ文台の

はしめにかひつ暮ける

聞なれた鶏けいか鳴なり朝霞あさぎり

とりつきの家の梅うめ咲く小坂こさか哉

明るやら星の落込柳原

花はなすみれ大きな家の古りにけり

時ときめくやまつ蛤はまごのふり胡椒こしょう

朝日あさひさす戸は三尺さんせきの雉子きざし声

菜なの花は寐ねて見る程ほどもなかりけり

梅柳うめりゅうやたら見て来て門の月

すき服すきふくに白湯さかゆ呑む庵いおりの梅見うめみ哉

松まつもはや朧おぼろをつくれ宵よの雨

乗掛のりかけのほくりかくりと山笑やまわらふ

葵西あいらいの春

金令きんりょう(花押)

多代女

桐宇

素幽

其水

士篤

圓子

杉居

蘭路

蔦丸

旧莖

雨考

② 終日春曙亭にあそぶ

終日春曙亭しゅうじつしんしゆくていにあそぶ

きさらきや温耐ぬくね尽ぬ軒のきの梅

さくら饌そなえる枕まくらの函出はこで

目覚めざましに角かくの落おたる鹿撫かて

かた脛すねもたけ鶴伸つるのぶにけり

我門わがもん田水たみづを湛たて暮くれの月

秋あきの尾上おのえにしら雲くもの花

末略

安永八亥のとし

みちのく須加川連



印

印

佛仙

其白

露秀

州化

露滴

阡宜